

1

名古屋

大宝小学校

ウジハラ ユウキ  
氏原 裕貴

分科会番号

12

分科会名

自治的諸活動と生活指導 (小学校)

研究題目

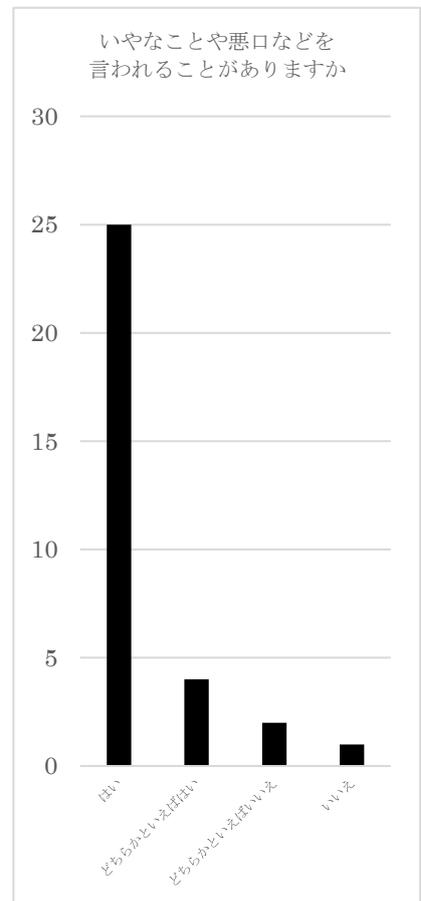
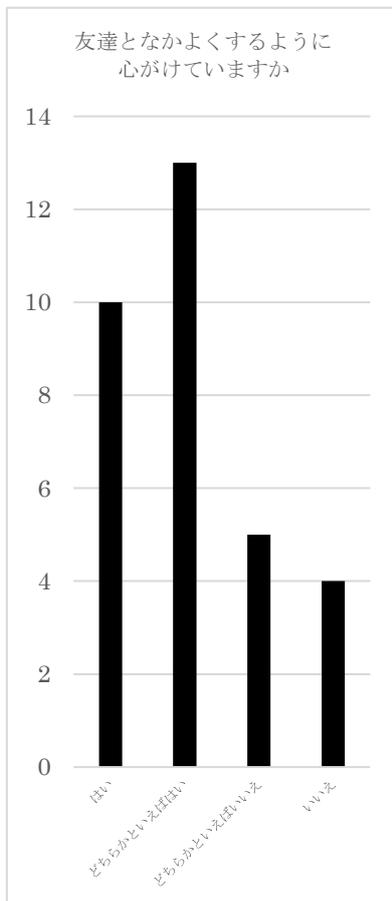
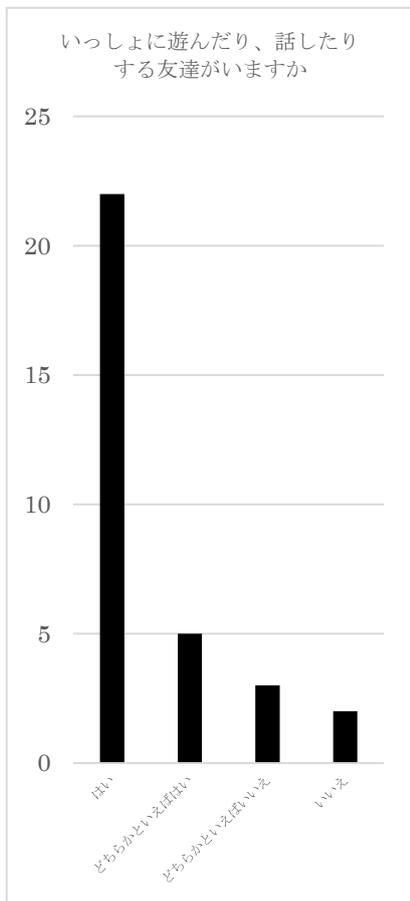
周りのことを考え、友達と協力できる児童の育成

1 研究のねらい

私は、「周りのことを考え、友達と協力できる児童」を育てたい。児童が自分のことだけでなく、周りの友達と協力しながら、学級全体で今の状態よりよい状態を目指し、そのために何をしたらよいか一人一人が考えることができるようにしたい。私の考える「周りの友達と協力できる」という状態は、①一緒に遊んだり、話したりする友達がいる、②友達と仲良くするように心掛けている、③嫌なことや悪口を言われることがない状態のことである。

私が担任している3年生には、明るく元気いっぱいな児童が多く在籍している。しかし、元気な分、トラブルが多い。また、昨年度までの3学級が、今年度2学級になり、多くなった級友との距離感を掴めていないと感じる。休み時間になると、早く遊びたい気持ちから他の友達を押しつけて教室を出る児童。暴力や暴言を平気で吐く児童。「周りのことを考え、友達と協力」という言葉からは程遠い状態からのスタートであった。

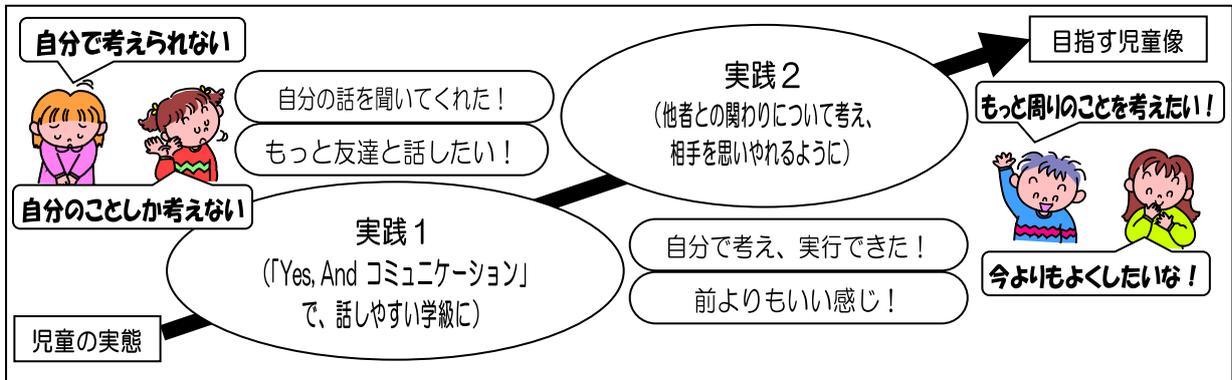
4月に、本学級の児童がどのような意識をもっているのか、アンケートを行った。「いっしょに遊んだり、話したりする友達いますか」の質問に対し、「はい」と答えたのが22人(68%)、「友達となかよくするように心がけていますか」の質問に対し、「はい」と答えたのが10人(31%)、「いやなことや悪口などを、言われることがありますか」の質問に対し、「はい」と答えたのが25人(78%)であった。このことから、本学級には、友達との関わり方に問題を抱えている児童が多いことが分かった。



【実態調査の結果】

「いやなことや悪口など」を言われた経験から、友達と仲良くすることに憶病になっているのではないかと私は分析した。そこで、相手が気持ちよくなるための言葉や、気を付けるとよいことを考えたり、自分や友達がよりよい状態になるためにどうすればよいかを考えたりする活動を通して、テーマに迫っていきたいと考えた。

## 2 実践の進め方（対象児童 第3学年1組 32人）



【本実践の内容を表した図】

(1) 実態調査（4月）、（7月）

(2) 研究計画

**実践1 「Yes, And コミュニケーション」で、話しやすい学級に（学級活動・常時活動）**

- ① 目標  
相手が気持ちよくなるための言葉や、気を付けるとよいことを考えることができる。
- ② 活動内容

- ① よい会話と悪い会話の例を示す。
- ② 「Yes, And コミュニケーション」の説明をする。
- ③ 「Yes, And コミュニケーション」を体験する。
- ④ 活動を通して気付いたこと、感じたことを発表する。

**実践2 他者との関わりについて考え、相手を思いやれるように（学級活動）**

- ① 目標  
自分の行動を振り返り、今よりもよい状態になるためにどうしたらよいかを考え、友達と共有する。さらに、実際に行動して、その振り返りをする事で、よりよい状態に近付くことができるようにする。
- ② 活動内容

- ① 他者との関わりの中で、今よりよい状態になるためにどうすればよいか、自分の考えをもつ。
- ② 自分の考えを友達と共有する。また、お互いの行動を見合う。
- ③ 実行してみた結果どうだったか考える。
- ④ 振り返りを行い、明日からの自分の行動に生かす。

## 3 実践の内容

**実践1 「Yes, And コミュニケーション」で、話しやすい学級に（学級活動・常時活動）**

(1) 実践の様子

- ① よい会話と悪い会話の例を示す  
好きな食べ物についてある児童に言ってもらい、例として教師が2つのパターンの反応を示して、児童に感想を聞いた。

(悪い会話)

「はあ？〇〇のどこがおいしいの？△△の方がおいしいじゃん。」

(よい会話)

「そうだよね。おいしいよね。〇〇もおいしいけど、△△もおいしいと思わない？」

私は、悪い会話のあと、「ごめんね、いきなり嫌な言い方をして。どんな気持ちでした？」と児童に問い掛けた。「すごく嫌な感じがした。自分が言ったことを聞いてもらえていない感じがした」と答えた。また、よい会話のあと、「はい、ありがとう。今度はどんな気持ちでした？」と問い掛けた。児童は、「うれしい。自分の言ったことを聞いてもらえている感じがした」と答えた。

② 「Yes, And コミュニケーション」の説明をする

例を示した後、「2回目の先生の話し方を、『Yes, And コミュニケーション』と言います。相手の話を気持ちよく受け止めながら、自分の話をします。自分とは考えが違っても、『そうだよね』と認めてから自分の話をする、お互い気持ちよく話ができるよ」と伝えた。児童は教師の話真剣に受け止めているようだった。

また、よりわかるように下記のような「“Yes”の例」を児童に示した。

“Yes”の例

・いいね～・そうなんだ・そうだよね・なるほど・たしかに！

③ 「Yes, And コミュニケーション」を体験する

活動中、教師は児童の活動の様子を共感的に受け止め、どんどん話をつなげるように声掛けをした。また、児童には楽しく話せるような雰囲気を意識するよう伝えた。右図のようなルールやテーマで行った。ある児童は、「行ってみたいところ」のテーマに対して、「僕はアメリカに行ってみてみたいな」とペアの友達に伝えた。すると相手の児童は、「あー、アメリカもいいよね！ニューヨークって聞いたことあるな。でも僕は、日本国内もいいと思うな。沖縄に行ってみてみたい」と会話を続ける姿が見られた。

別の児童は、「好きな〇〇」のテーマに対して、「好きなゲームについて話そうよ」と、積極的に取り組んでいた。他の児童は、「誕生日に欲しいもの」について話したときには、「新しい服が欲しい」と言った友達に対して、「服もいいね。私はカメラが欲しいな」「じゃあ、そのカメラで、新しい服を着た私を撮ってよ」などと、楽しそうに会話をする姿が多く見られた。

④ 活動を通して気付いたこと、感じたことを発表する

2人で会話して気付いたこと、感じたことを発表させ、学級で共有した。整理して板書をし、相手が気持ちよくなるための方法を考えさせた。「相手の言ったことを否定せず、一度受け止めることが大事だと思った」と感想をもった児童が多かった。最後に、今日の学びをどのように生かしたいか、考えさせた。「今度休み時間に友達と話すときには、今日の『Yes, And コミュニケーション』を意識したい」と感想をもった児童がいた。

(2) 実践を振り返って

児童は「Yes, And コミュニケーション」を知り、体験したことで、友達と気持ちよく話す上で、大切なことを考えることができた。そして、実際に「Yes, And コミュニケーション」を意識して友達と会話をする児童が増えてきた。しかし、一部の児童は学習したことを継続して意識することが難しく、トラブルを起こすことがあった。そこで私は、本実践は継続的に行う必

ルール

・1回2分 ペアを変えて数回行う

テーマ

- ・行ってみたいところ
- ・好きな〇〇
- ・誕生日に欲しいもの

【Yes, And コミュニケーションのテーマとルール】



【児童の活動の様子】

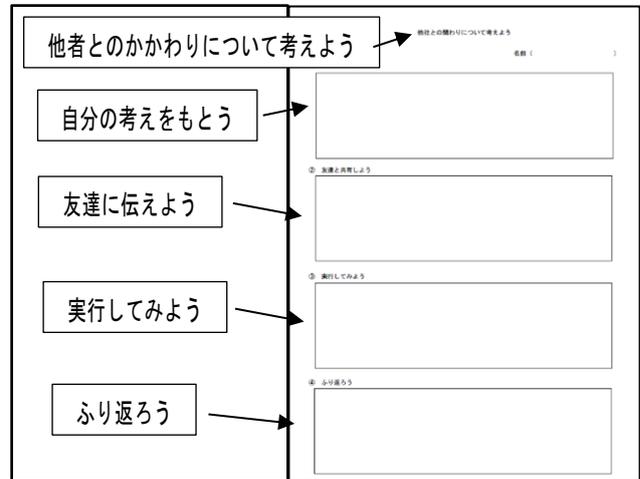
要があると感じ、朝の会に時間をとり、「好きな季節」や「好きな食べ物」などのテーマを日ごとに変えて「Yes, And コミュニケーション」に取り組ませた。「春もいいね」「秋もいいね」と相手の気持ちを考えながら話していた。

**実践2 他者との関わりについて考え、相手を思いやれるように（学級活動）**

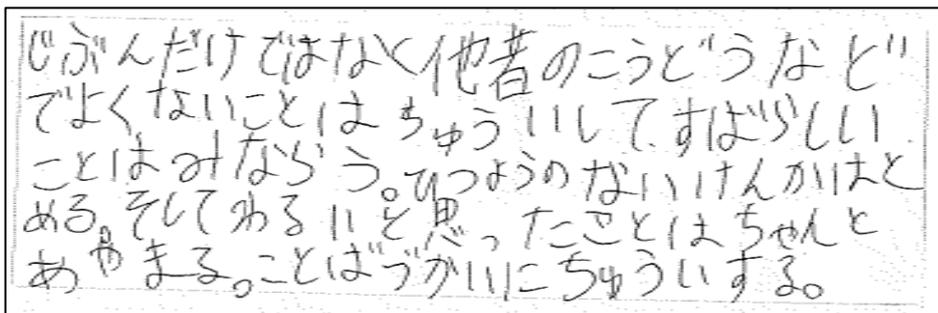
(1) 実践の様子

① 他者との関わりの中で、今よりよい状態になるためにどうすればよいか、自分の考えをもつ

私はまず、学級の児童に「最近の3年1組の雰囲気はどう？」と問い掛けると、「ケンカやトラブルが多い」といった声が多くあがった。あまりいい状態ではないことを児童も理解していたようであった。そこで、「このままでいい？」と問うと児童は首を横に振った。「授業中だけではなく、休み時間や給食、掃除の時間などに、今よりもっとよい状態になるために、あなたたち一人一人にできることを考えよう。自分の考えをもつことが大切なんだよ」と声を掛けた。児童はじっくりと考えた。A児は「良くないことは注意して、すばらしいことは見習う。必要のないけんかは止める。悪いと思ったことはちゃんと謝る」と記述する姿が見られた。



【本実践で用いたワークシート】



【A児の記述①】

② 自分の考えを友達と共有する。また、お互いの行動を見合う

次に、友達と考えを共有する時間をとった。

「〇〇くんは△△をやるって決めたんだね。」と声を掛け合う姿が見られた。私は、「これから、その友達のことをいつもよりよく見ていてね。行動が変わったと思ったら教えてね」と声を掛けた。その日の児童は、学習中や休み時間にお互いの行動を見合い、声を掛け合う姿が多く見られた。「友達に優しく接する」と記述した児童は、理科の学習の実験の場面では、普段より友達と対話しながら、協力して取り組むことができていた。「風を強くして、もう一度やってみようよ」「それ、いいね。じゃあ、それが終わったら風受けを大きくしてみない？」「賛成！」と活発に意見交換しながら実験に取り組む姿が多く見られた。



【理科の実験に取り組む児童の様子】

③ 実行してみた結果どうだったか考える

意識して生活する中で、自分で考えをもったことが実行できたかどうかを尋ねた。「いつもより〇〇ができた」とうれしそうに答える児童が多かった。私は、「本当にできたの？今までの『やらなかった』と、『意識したけどできなかった』のは大きく違うよ」と声を掛けた。すると、「〇〇はできたけど、△△はできなかった」と、より深く振り返りを行う児童が増えた。A児は、「少し迷惑な行動をしてしまった」と振り返っていた。

【A児の記述②】

④ 振り返りを行い、明日からの自分の行動に生かす

振り返りの欄には、「これから  
は、もうちょっと周りの人の気持ち  
を考えていきたい」と記述する姿が  
見られた。また、別の日の様子を見  
ていると、「今日は友達に優しく声  
を掛けることを意識しているよ」と  
話しながら行動する児童の姿が見ら  
れた。

【A児の記述③】

(2) 実践を振り返って

今回の実践の前後では、児童の姿が大きく変わったことを感じた。「〇〇ちゃん、いっしょにやろうよ」と、協力して学習に取り組む児童の姿。トラブルはなくなった訳ではないが、「言い過ぎてごめんね。今度から気を付ける」と素直に友達に謝る姿。目指す児童像に学級の児童が近付いてきていることを感じた。

国語科の学習では、自分の考えを友達と共有する活動を行った。その際には、様々な意見を交流させる中で、相手のことを考えながら、これまで学んだことを生かして、友達と協力して課題に取り組む児童の姿が多く見られた。また、算数科の学習では、自由進度学習の中で、友達と協力して取り組むことができていた。



まいごのかぎは、最後にどうなったのかな。私は元の場所に戻ったと思うな。

その考え、いいね。私は、うさぎが持っているんじゃないかと思うんだけど、どうかな。

【協力して国語の学習に取り組む児童の様子】

4 実践のまとめ

(1) 実態調査（7月）

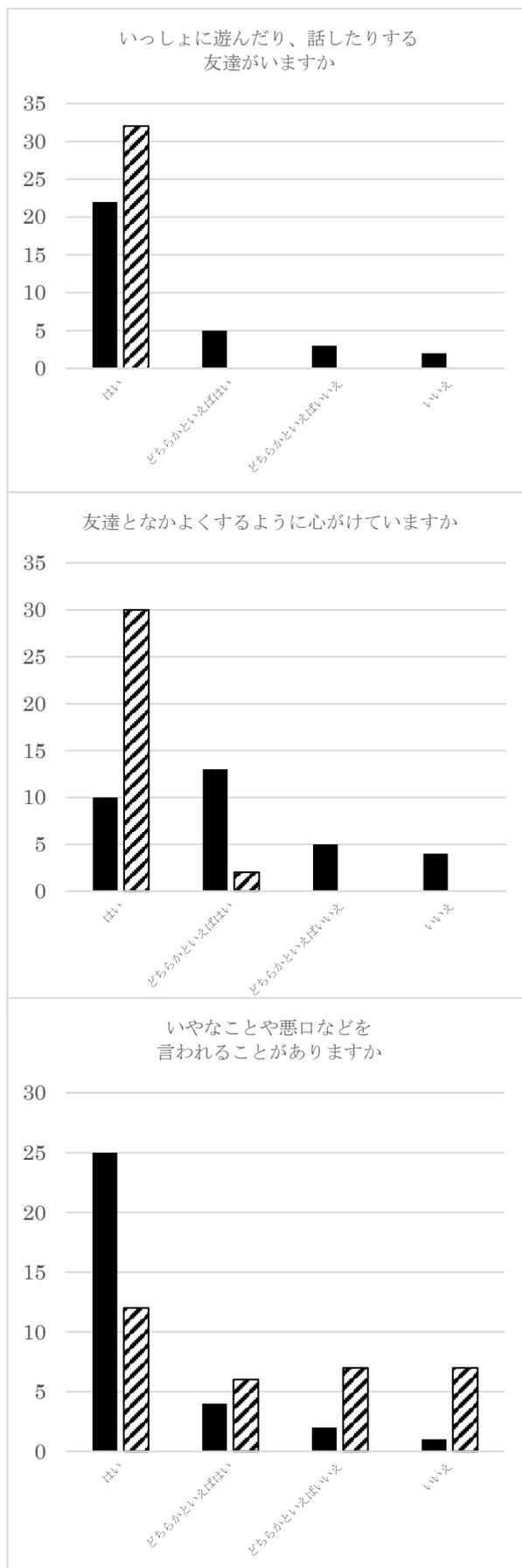
事後アンケートでは「いっしょに遊んだり、話したりする友達が増えましたか」という問いに全ての児童（32人）が増えたと回答した。また「友達となかよくするように心がけていますか」という問いにも、30人（93%）が「はい」と回答した。「いやなことや悪口などを、言われることがありますか」という問いには、12人（37%）の児童が「はい」と答えた。以上の結果から、友達との関わり方に問題を抱えている児童の意識に変化が起こったことが分かった。

## (2) 成果と課題

事後アンケートの結果から、事前に7割の児童が「友達がいる」と回答していたのに対して、児童全員が「友達がいる」と回答をした。このことから、今回の実践は、周りのことを考え、友達と協力することができる児童を育成する上で成果があったことが分かった。しかしながら、「悪口を言われることがありますか」という問いには、56%（18人）の児童が、悪口を言われることがあると答えた。今回の実践ではまだ、児童全員が周りのことを考えて行動できている訳ではないことが分かった。その原因として二つ考えられることがある。

一つ目は、児童の経験がまだ足りないということである。1学期実践だけでは、周りのことを考えたり、友達と協力したりする機会が十分ではなかったと感じる。1学期の実践を踏まえ、2学期以降も、実践を継続していく必要性を強く感じている。常時活動として「Yes, And コミュニケーション」に引き続き取り組んでいきたい。また、定期的実践2で行ったように、自分の考えをもたせ、友達と共有し、実行し、振り返るというサイクルをさらに定着させていく。この活動を繰り返し行い、学級全員の児童が安心して登校することができ、周りのことを考え、友達と協力することができる学級をつくっていききたい。

二つ目は、「悪口を言われる」側に着目して分析、実践をしたからこそその結果であるという点である。「悪口を言う」側の意識改革になるような実践をもっとしないと、悪口はなくなるならない。周りの児童がいくら変容しても、悪口を言う児童が一人でも学級にいれば、「悪口を言われることがありますか」という問いに対する回答の数値はゼロにはならない。悪口のない、心理的安全性の高い学級をつくっていききたい。良好な学習集団の環境を整えば、心理的安全性は高まっていくのではないかと考える。児童が見当違いの発言をしたとしても個人的に批判されない、異なる見解のグループ同士が建設的に話し合えることができる学級をつくる方法を模索し続けたい。



【実態調査の結果（左黒：4月、右斜線：7月）】